

キリシタン時代日本人のラテン語作文にみられる古典受容  
——ジョルジュ・ロヨラの 1587 年 12 月 6 日付書簡 (ARSI  
Jap.Sin.10.II.296) と伊東マンショの 1592 年 12 月 1 日付  
書簡 (ARSI Jap.Sin.33.66\*<sup>1</sup>) を中心に——

渡邊顕彦

## はじめに——西洋古典と近代

日本と古代ギリシア・ローマ世界の間には地理や文化等の大きな隔  
たりがあるが、接点も多くある。古代ギリシア・ローマの受容は漫画  
をはじめ日本の一般大衆文化でもみられるし、東京大学ほか複数の日  
本の高等教育機関では西洋古典を扱う専門課程も設置されている。た  
だ現在の日本の西洋古典研究は、多くの場合、かのラファエル・フォ  
ン・ケーベル\*<sup>2</sup>およびその弟子達が目指していたもの、すなわち近代  
日本の積極的かつ性急な欧米文化摂取という大きな流れの中にあっ  
て、近代西洋教養人達が自身の精神的故郷とみなしてきた古典的教養  
文化を彼等の学習をなぞる形で学び、その成果を社会に知らしめると  
いう作業を続けてきたといえるのではないだろうか。つまり古代地中  
海を一応は研究対象としながら、学習の経路と思考の枠組としては近

---

\*<sup>1</sup> ARSI Jap.Sin.33 の丁数は新旧の少なくとも 2 通りがある。本稿では、尾原 (1981)  
や結城 (1990、1993) も使用している旧丁数を採用するが、ローマイエズ会文書  
館が現在使用している新丁数では、伊東マンショの 1592 年 12 月 1 日付書簡本文  
は ARSI Jap.Sin.33.61 となることに注意されたい。

\*<sup>2</sup> ケーベルと日本の西洋古典学については松本 (1965) 参照。

代西洋を中心として、時にはそれに無自覚に同調し、時には表立っては反発しながらも、あくまで近代至上あるいは近代中心的で、実証主義、合理主義、進歩主義等に染まった価値観・世界観・歴史観の中に留まる傾向があったとはいえないだろうか<sup>\*3</sup>。

本稿では古代ギリシア・ローマを、西洋近代学術界を経由して観るという現代では一般的なアプローチをあえて少し脇に置き、一次対象として近世、具体的には16世紀から17世紀の日本における西洋古典受容をとりあげたい。ちなみに、日本で西洋古典が原典で読まれるようになったのは19世紀終わり、もしくは20世紀初頭以降というのが一般的(もしくは「近代的」)な理解かもしれない<sup>\*4</sup>が、実はそれを数世紀遡りいわゆるキリシタン時代にも日本人が古典を含むラテン語文献を学習していたことは既に確認されている<sup>\*5</sup>。そしてこの近世初期の日本における西洋古典受容という現象は、今の西洋古典研究者の多くには一見異質・異様なものと映るだろうが、よく吟味してみると現代の教育者として参考に出来る事柄も、そして西洋古典を専門とする者ならではの理解・鑑賞が可能な部分もあると筆者は信じる。ただキリシタン時代の西洋古典受容は一次資料や歴史的対象に大きな広がりがあり、研究調査が未だ網羅的にされていないため、未発見および未整備な事柄が多くある。そこで本稿では今までの各種研究成果を参考にし、表題にある2点の一次資料<sup>\*6</sup>に焦点をしばらくつつも、西洋古典研究者からみた要点や将来的な調査の可能性を示唆するにとどめなければならない。

<sup>\*3</sup> 西洋古典学が様々な意味で近現代西洋の枠組みに囚われているのではないかという指摘は欧米でも頻繁になされるようになってきている。例えば Goldhill (2002) 参照。ただ近代西洋も伝統的西洋古典学も必要なのは自己反省ではなくその価値の再確認と称揚であるという保守的な意見もある。例として Hanson & Heath (2001) 参照。

<sup>\*4</sup> 例えば Kure (1955) 100-101 参照。

<sup>\*5</sup> 参考文献は以下随時示していくが、この分野で特にバイオニア的な業績として原田 (1998A) をまず挙げておきたい。

<sup>\*6</sup> 双方とも現物はイエズス会ローマ文書館 (ARSI=Archivum Romanum Societatis

## 背景概観——16～17 世紀の日本イエズス会セミナリヨとラテン語学習、および西洋古典受容

キリシタン時代日本の西洋古典受容全般については、総合的な調査が未だないので、本項では在来の研究成果に筆者の調査結果や意見もまじえて若干の背景説明を行いたい。ところでいわゆるキリシタン時代を西洋古典受容という特殊な視点から観る際には、第 1 期をザビエル来日からヴァリニャーノ来日まで (1549～1579 年)、第 2 期を日本のイエズス会セミナリヨが運営されていたキリシタン教育全盛期 (1580～1614 年)、そして第 3 期を日本人神学生や司祭が国外で研修を続け、あるいは国内に潜伏しつつ司牧活動を行った最終期 (1614～1630 年代後半から 1640 年代前半)、というようにとりあえず 3 区分すると便利かと思われる<sup>\*7</sup>。本稿では後に第 2 期の初頭を中心にとりあげる予定だが、第 3 期からも特に注目に値する一次資料が幾つか遺されている。

対して第 1 期は一次資料が比較的少ないようでありまた研究調査も進んでいない印象を受けるが、かのフランシスコ・ザビエルが国内外で出会った日本人の中には、ヨーロッパ言語文化をある程度吸収し少なくともポルトガル語の運用が出来る者がいたことは確認されている。中でも薩摩のベルナルドという日本人改宗者はザビエルに従って離日、続いて渡欧し、1553 年から 1557 年までポルトガルとイタリアで初期イエズス会の活動に参加しながら高等教育も受けている。彼はおそらくラテン語も学んでいると推定されるが、残念ながら在欧中に

---

Iesu) にあり、上智大学キリシタン文庫も複写版を所蔵している。現物の電子画像を送付していただいた ARSI の Mauro Brunello 氏と度々の複写版閲覧を許可してくださった上智大学キリシタン文庫に感謝する。

<sup>\*7</sup> 無論これは古典受容の視点から行う一時的な区分であり、キリシタン研究においては別の区分もされている。例えば宮永 (2004)15-17、105 参照。

客死しており彼の学修内容も未だ詳しく判明していない\*<sup>8</sup>。その後日本国内ではザビエルに続き訪日したイエズス会士達が初等教育を行い、典礼で使われる文言や使徒信条、基礎的な祈祷文等をラテン語で信徒に覚えさせたとの記録はあるが、文法全般から古典文献に至るラテン文学の体系的・包括的な教授は第1期には(少なくとも国内では)行われなかったとみられる\*<sup>9</sup>。

この状況が一変したのが1579年の東インド巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ来日、そして彼が主導した日本布教体制の抜本的見直しによってである。日本人を白人とみなしたヴァリニャーノ\*<sup>10</sup>は、文化的差異が多少あろうとも、彼等に西洋カトリック世界の人文教養を含む教育さえ施せば彼等自身による持続的な布教体制が確立出来るという(見ようによっては安易で非現実的ともいえる)見通しでイエズス会日本事業の現地化を推進した。この目論見に沿いヴァリニャーノは1580年にラテン語と日本語の人文教育を10代の少年達に施す寄宿制のセミナリヨ\*<sup>11</sup>を発足させ、早くもその2年後にはセミナリヨ生4人を選抜し、かの天正使節としてヨーロッパに派遣している。ちなみに本稿で後にとりあげる一次資料2点の発信者は兩人ともこの使節団の参加者である。

そしてこの天正使節と同時にイエズス会の対日本人印刷事業も開始される。その成果がいわゆるキリシタン版と呼ばれまたそれに準ずるもの\*<sup>12</sup>で、日本ではどうしても邦文で刊行されたものが注目されがちだが、西洋古典を専門とするものとしては古典を含むラテン語の出版物も明確に日本人向けに作成されていたことに注意したい。ただこれ

\*<sup>8</sup> 薩摩のベルナルドについては Pasquale(1959) 参照。

\*<sup>9</sup> まとめとして例えば宮永(2004)4-23 参照。

\*<sup>10</sup> Kevak(2011) 29、38。

\*<sup>11</sup> 日本のセミナリヨの制度や教育内容については桑原(2009)等参照。

\*<sup>12</sup> ラテン語文献を含むキリシタン版については Laures Database <<http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/html/index.html>>が翻刻、復刊、翻訳等の有無を含め書誌情報を豊富に提供しているので参照されたい。

らラテン語出版物も包括的・網羅的に描写する準備は未だ出来ていないので、その端緒として印刷事業の最初期に出された3点を以下短く論じ、当時の日本人に教材として呈されたラテン語文献の特徴を明らかにしたい。

最初に、1586年にリスボンで印刷された *Catechismus Christianae fidei, in quo veritas nostrae religionis ostenditur, et sectae Iaponenses confutantur*(以下 *Catechismus*) をとりあげる。題名が示す通りカトリックの教理を説明したもののだが、全2巻のうち第1巻は日本在来宗教の論破が中心となっており、明らかに他所で行われていた要理教育の単なる重版ではない。同時代の記録から、この作品は日本人の協力も得てヴァリニャーノがまず俗語で起草した草稿をヨーロッパに送り、それがかの地でラテン語に翻訳され、印刷出版されて東洋に持ち帰られたことが明らかにされている。文体は、一部地名や在来宗教関係で輸入語 (e.g. *Iaponii*, *Cami*, *Fotoque*)、またキリスト教あるいは学術用語で非古典語彙 (e.g. *angelus*, *propheta*, *substantialis*) が使われているほかは平易で読み易い擬古典ラテン語であり、無名翻訳者のバランスのとれた人文教養を窺わせる。

次に、マカオで1588年に出版された *Christiani pueri instutio adolescentiaeque perfugium* をみてみよう。これはスペインのイエズス会教育者ファン・ボニファシオが1575年に出版したものにヴァリニャーノが若干手を加えた日本人向け改訂版である。題名はキンティリアヌスの *Institutio oratoria* を連想させるが、内容はワレリウス・マキシムスを想起させる修辞技法満載の逸話集に、美德についての模範演説を幾つか付したものである。文体はこれでもかという程、仰々しい修辞修飾を詰め込んだ擬古典風で、これが模範的なラテン語と当時の日本人にうけとめられていたならば、天正少年使節の一人原マルチノが1587年に行い1588年に印刷され遺されている演説の装飾過多ぶ

り<sup>\*13</sup>も納得できるというものである。またボニファシオが集めた逸話の一部、異教古代起源のものがあるが、新旧約聖書や古代から近世に至るまでのカトリック聖人伝、奇跡譚等から採られたものがやはり多い。ヴァリニャーノは、1587年12月1日付の書簡で日本人に読ませるラテン語文献からは異教古代の要素を排除すべきだという方針を述べている<sup>\*14</sup>が、彼が底本として採用したボニファシオの教科書もある程度(完全にではないが)この方向に沿っているといえる。またマカオ版には日本に言及した内容も一部あり(12、53-54)<sup>\*15</sup>、日本人読者の興味をひく工夫もされているようである。

最後に、同じくマカオで1590年に出版された *De missione legatorum Iaponensium ad Romanam curiam rebusque in Europa ac toto itinere adimadversis dialogus*(以下 *De missione legatorum Iaponensium*) をみてみる。これはヴァリニャーノが同書の前書き(A2)で述べているように、上記二つに続き日本人向けのラテン語教材第3弾として企画出版させたものである。内容は、天正使節達が帰国後、2名の他日本人達をまじえて彼等自身の旅行および異文化遭遇体験を対話形式で語るというものである。教材としての創作対話というジャンルは、無論古代ギリシアからの長い伝統をひきついで16世紀のラテン語文学でもポピュラーであったし、非ヨーロッパ現地民をこのような対話に登場させる試みも既に16世紀半ばのメキシコでなされている<sup>\*16</sup>というような当時の事情を勘案すると、この作品の設定もそれほど奇天烈なものとは思われないだろう。ただこの文献の作者が誰なのかという問

<sup>\*13</sup> 原マルチノ演説については渡邊(2012)参照。

<sup>\*14</sup> Jesuits (1598) II 233、井手(1995)10-11。

<sup>\*15</sup> 片岡(1969)44-50も比較参照。

<sup>\*16</sup> 近世人文ラテン語文学における創作対話教材については Ijsewijn & Sacré (1998)229-231 およびオンラインの16世紀ラテン語対話データベース Colloquia Scholastica <<http://www.stoa.org/colloquia/>>も参照。特に Franciscus Cervantes de Salazar の *Ad exercitia linguae Latinae dialogi*。また16世紀にアメリカ大陸スペイン植民地においてなされた対インディオラテン語教育については Laird (2010) 参照。

題はかなり込み入っている。まずその成立は、同書の内容および同時代の他記録を総合すると、旅行中に使節達が(何語でかは明らかでないが)つけていた日記を基にヴァリニャーノがヨーロッパ俗語で起草編集し、それをポルトガル人イエズス会神父サンデがラテン語に翻訳したという経緯を辿っていると推定される<sup>\*17</sup>。ただ使節達の日記もヴァリニャーノの俗語手稿も現存していないので、成立過程の詳細は不明としか言いようがない。ちなみに後述するように作者性の曖昧さは日本人キリシタンが書いた(とされる)ラテン語文献にもある程度共通する問題ではある。本書の文体は、サンデの他にも当時マカオにいた複数の人文教養のある神父達の審査も合格したと報告されている<sup>\*18</sup>のもうなずける、非常に流暢で読み易く、美しい擬古典ラテン語である<sup>\*19</sup>。ただ非古典的な語彙も、最初に挙げた *Catechismus* より控え目にではあるが、同時代の日本やヨーロッパの事象を描写する際一部使われている。

以上3点のみをみても明らかになるのは、ヴァリニャーノが日本のセミナリヨ生もヨーロッパのカトリック教育組織および人文学者達が使用していた擬古典ラテン語が読める、あるいはじき読めるようになるという見通しで物事を進めていたことである。ちなみに教育的には順序が逆のようだが、包括的なラテン語文法書および辞書も日本人向けに(日本語の注釈・語義付きで)この後1593年から1595年にかけて国内で印刷されており、セミナリヨ生に重宝されたと思われる。またラテン語の教理書等も前記のものに続けて日本のセミナリヨで印刷されていたが、古典関係ではキケロの演説集が1592年10月以前、ウェルギリウスも1600年頃、日本で印刷されていることを同時代の記録が確実に伝えていることは注目に値しよう<sup>\*20</sup>。両書とも残念なが

<sup>\*17</sup> Moran (2001) 参照。

<sup>\*18</sup> ヴァリニャーノの1589年9月25日付書簡による。片岡(1969)52参照。

<sup>\*19</sup> 同書の文体についてはBurnett (1996)、特に439を参照。

<sup>\*20</sup> 詳しくはLaures Database <<http://laures.cc.sophia.ac.jp/laures/html/index.html>>中の

ら現物が発見されておらず、何語で印刷されたのかもはっきりと記録されていないものの、その用途はラテン語の文体学習以外想定しづらいので、翻訳ではなかったとほぼ断定できる。

このようなヴァリニャーノをはじめとするヨーロッパから派遣されたイエズス会士達のラテン語教授の働きかけに、日本人セミナリヨ生や神学生達もある程度の進歩を示して応えていた形跡は数多く見つかる。本稿でとりあげる書簡2通や先に挙げた原マルチノ演説の他に、1603～1604年にかけて日本セミナリヨ生達がイエズス会総長に送ったラテン語書簡<sup>\*21</sup>等、幾つかの日本人作者の名がつくラテン語文書が第2期から出ているし、続く第3期にラテン語を書き遺した日本人もほぼ全員が日本のセミナリヨで教育を受けた者達である。また、1593～1594年のイエズス会報告書にみえる日本セミナリヨの描写によると生徒達は演説、討論、演劇、作詩<sup>\*22</sup>をラテン語で行い祝祭等の機会に披露していたという<sup>\*23</sup>。少なくとも1590年代初頭以降は、日本人のラテン語学習・使用は単なる掛け声や見せかけでなくセミナリヨで現実に行われていたとみられる。

ただ日本セミナリヨ生のラテン語能力は低かったという意見も一部研究者の間<sup>\*24</sup>ではみられる。よく挙げられるのがヴァリニャーノが1592年に記した、日本人がラテン語を学習するのは困難であって今まで彼等のうち誰もこの言語を大雑把に (groseramente) 理解する以上には上達しなかったという一文である<sup>\*25</sup>が、これは逆に言えば少なくとも一部はラテン語のある程度の読解は出来ていたというふうにも解釈出来る。また正にこの学習の困難がはっきり認識されたため、それを克服する方法も模索され、結果として1592年を境にセミナリヨ

---

JL-37-36-31-5 および JL-37-36-31-13 14 参照。

<sup>\*21</sup> ARSI Jap.Sin.33.1603.10.1 (III.1)、ARSI Jap.Sin.33.72-73v. (III.2)。

<sup>\*22</sup> 特に作詩については原田(1998A)8-38 参照。

<sup>\*23</sup> 片岡(1969)33-34、106 等参照。

<sup>\*24</sup> Moran(1993) 152-153 等。

<sup>\*25</sup> Valignano(1954) 567。井手(1995)54、Moran(1993) 152-155 もあわせて参照。



における日本語とラテン語の並行学習という創立以来の方針が改められ、年少の入学者にまずラテン語を数年間徹底的に学ばせ、後に日本語学習を許すというカリキュラム改訂が為されたのであった。

もちろん日本のセミナリヨが運営されていた 30 数年間、入学した生徒の全てがラテン語に堪能になったわけではおそらくなく、学習の困難から中途退学するものもいたし中には実際の能力は伴わないまま進級、卒業してしまったものもいたかもしれない。しかしここで同時に認識しておかなければいけないのは、同時代のヨーロッパにおいてですら、高等教育を受ける者、あるいはカトリックの聖職者となることが期待されている者の多くが実際のところ相当低レベルのラテン語理解力にしか達していなかったと最近の調査では推測されていることである<sup>\*26</sup>。ヴァリニャーノや他一部のヨーロッパ出身イエズス会士達は日本人キリシタンのラテン語能力に時に失望することがあったかもしれないが、そもそも彼等が最初に抱いた期待が、日本の文化的歴史的背景のみならずヨーロッパの現状を鑑みても非現実的なものであったことがその原因の一つとしてあるのではないだろうか。また当時ヴァリニャーノを含む東方に派遣されていたヨーロッパ出身イエズス会指導者達自身が練習機会の不足、多忙、書記の不備等を言い訳にしてほとんどの場でラテン語ではなく俗語使用を選んでいる<sup>\*27</sup>こと

<sup>\*26</sup> Waquet (2001) 132-151 等参照。例えばエラスムスやムレトゥス等の人文学者が擬古典ラテン語を日常的に使用出来ていたことは疑いないものの、このような能力が当時ヨーロッパの教育現場でどれほど現実一般的だったのかは今後も多大な検討の余地がある。ただし整備された統計資料が当時から遺されているわけではないので、調査結果はどうしても印象論的かつ点描的にならざるを得ないだろう。

<sup>\*27</sup> ヴァリニャーノのラテン語 (不) 使用については Moran (1993) 37 参照。ほか来日ヨーロッパ出身宣教師達の中にもラテン語運用に困難を感じる者が多かったことが当時の記録より若干察せられる (五野井 (1978)357-359、岸本 (2013)241 参照)。しかし一方で例えばマカオのサンデ、日本では前述のパレトや、コインブラ大学教員を経た後 1582 年から 1600 年に没するまで日本に滞在し、日本人コレジヨ生向けの教科書 (ラテン語手稿で現存) を執筆したベドロ・ゴメスが高度なラテン語作文能力を持っていたことも疑いが無い。

からして、彼等に日本人のラテン語習得に文句を言う資格があったのかと問いたくもなる。しかしヨーロッパにおけるイエズス会系校を含む様々な教育現場で同時代に行われていたラテン語教育とその成果についてはそれら自体についての調査研究が未整備であるので、日本のセミナリヨとの比較は今後の進展を待たなければならない。ちなみに非ヨーロッパ圏、特に南米におけるインディオに対してカトリック宣教師達が行ったラテン語教育<sup>\*28</sup>も比較対象となり得るが、こちらは今後の課題としたい。

さてこのセミナリヨも 1614 年には日本から姿を消し、在籍学生・教員の多くは離日することを余儀なくされる。日本人を再度集めて神学教育をしようという試みもマカオとフィリピンで一時期あったものの長続きせず<sup>\*29</sup>、結局少数の幸運と行動力を兼ね添えた者達がイタリアやイベリア半島に渡って研修を続け、また短い期間東南アジアに滞在してから日本に再潜入する者達もいた。この第 3 期にラテン語で作文していることを筆者が確認している日本人は 5 名いる<sup>\*30</sup>が、うち一次資料の比較的多い 3 名について以下短く述べる。

まず荒木トマスは遠藤周作の小説でも有名だが、近年されている推測では彼はおそらく 1600 年頃日本のセミナリヨを卒業しており、その後何らかの理由で離日し、スペイン領フィリピンとメキシコを経由して渡欧、1604 年から 1611 年までローマで学習し司祭に叙階された。それから彼はアジアに戻り、マカオ滞在を経て 1615 年 8 月に帰国しているが、再来日を前にした同年 1 月に彼がラテン語でイエズス会総長に宛てて書いた書簡が遺されている。文体は統辞で見過しが一箇所可能性としてあるほかは完璧といってよく、締めくくりではさりげなく使徒行伝中のパウロの演説を引用して<sup>\*31</sup>自身の日本宣教にかける

<sup>\*28</sup> Abbott (1996) 42-44、Laird (2010) 参照。

<sup>\*29</sup> 岩生 (1966)307-313 およびチースリク (2004)212、273-274 参照。

<sup>\*30</sup> すなわち荒木トマス、岐部カスイ、後藤ミゲル、ミゲル・ミノエス、結城ディエゴ。

<sup>\*31</sup> ARSI Jap.Sin.16.II.1r-1v<Act.20.22-23。

覚悟を表明している。しかし荒木は1619年に捕らえられて獄中で棄教し、1630年代後半までいわゆるキリシタン目明しとして活動、かつオランダ人貿易にも関与していた。このような流転を経た彼が1631年10月16日付でオランダ人商人に書いたラテン語書簡が受け手による写しで現存する<sup>\*32</sup>が、統辞のみならず名詞の数や性でも驚くほど初歩的な間違いが多く表現も単調で、現在確認出来ている日本人キリシタン(この場合棄教者ではあるが)によるラテン語作文としては間違いなく最低レベルである。写し製作者の過ちも混入しているかもしれないが、それにしても粗が多すぎて同じ人物が書いたはずの1615年の書簡とは隔世の感がある。両書簡の間には単純にトマス荒木のラテン語能力の劣化があったと解釈出来るが、あるいは想定されている読者の違い、つまり一方はカトリック教会組織の高位者であり、他方はオランダ人商人であったという事情も考慮すべきかと思われる<sup>\*33</sup>。

次に岐部カスイをみてみよう。彼は1600年から1606年まで日本のセミナリオに在籍し、1615年に離日、マカオに渡り、そこからインドを経て地中海まで旅している。そして1620年にはローマに至り、イエズス会入会と司祭叙階を果たし、1623年までローマとリスボンのイエズス会修練院に在籍していた。続いて1625年から1629年までは東南アジア各地で活動し、1630年に帰国、1639年夏に仙台領で捕縛され江戸で殉教している。このようにユニークな経歴を持つ岐部カスイの書いたラテン語文書も1620年から1630年にかけてのものが数点遺されており、詳細に論じる余裕は今ないが非常に個性豊かで読みごたえのあるものである。彼のラテン語の興味深い点は、一見すると表現豊かで古典的な修辞も強く感じさせる一方、細かい綴りや統辞と

<sup>\*32</sup> オランダ国立公文書館所蔵文書番号 NA1.04.02: 1110: Japan: 467r. 五野井(2007) 31-32に翻訳あり。

<sup>\*33</sup> トマス荒木の事績については高瀬(1994)595-630、五野井(2007)参照。なお彼が私蔵していた羅葡日辞書がバリに現存している可能性については原田(2011)278-289参照。

いった面でヨーロッパ俗語の影響が見受けられ<sup>\*34</sup>、34 また動詞の語形変化で明確な過ちを犯してしまっている<sup>\*35</sup>というように粗があるところである。しかし当時のヨーロッパ出身カトリック関係者にも彼のラテン語書簡は好印象を与えたらしく、1631年メキシコで出版された書籍に1点がスペイン語の翻訳を付して紹介されている<sup>\*36</sup>。

第3期にラテン語文書を遺した3人目の日本人として結城ディエゴ<sup>\*37</sup>をとりあげる。彼は3人のうち最年長者で既に1586年にはセミナリヨに入学し、1595年に卒業、国内で研修を続け、1601年から1604年にかけてマカオのイエズス会コレジヨに在籍している。帰国後彼は母校セミナリヨのラテン語教師や巡回説教師の役をこなし、1614年の追放時は高山右近等と共にフィリピンのマニラに渡った。彼がマニラ滞在中の1615年8月にイエズス会総長宛に送ったラテン語書簡は別の拙稿<sup>\*38</sup>にてとりあげているが、文法的にも粗がまったく無く、詳細に読むと古代教父や同時代のヨーロッパ人文学者も作者が学習参照していたことがうかがえる、学識豊かなものである。続いて1616年半ばに結城は日本に再潜入し、潜伏活動中の1625年暮れに近畿地方からローマに宛てたラテン語書簡が現存のものとしては彼の手による最後の文書となる。この几帳面に記され文法的にも完璧なラテン語書簡<sup>\*39</sup>は、キリシタン日本人の書いたラテン語作文のうち(その執筆状況を鑑みて)単独作者性が最も確実であるという意味でも貴重である。結城ディエゴのラテン語はかつてセミナリヨのラテン語教師を務めていたというのうなずける、細部まで入念に凝ったもので、岐部カス

<sup>\*34</sup> 例えば ARSI Jap.Sin.34.198r. (morantur...studendo...convalescendo)、Jap.Sin.34.199r = 201r. (Machai in Decembro an. 1626...)

<sup>\*35</sup> ARSI Jap.Sin.34.199r=201r. (vescebamus...accingi (pro accinxi))。

<sup>\*36</sup> 岐部カスイの事績やラテン語文書については、チースリク(1995)およびチースリク(2004)263-325 参照。

<sup>\*37</sup> 結城ディエゴの事跡については三木(2007)、結城(2008) 参照。

<sup>\*38</sup> 渡邊(2013)。

<sup>\*39</sup> ARSI Jap.Sin.247r-247v。原文翻刻および翻訳・解説は原田(1998B)275-284。

イの気宇壮大な一方随所に粗がみえる文体とは好対照をなしている。

以上、いわゆるキリシタン時代の日本人による古典を含むラテン語学習、およびその成果としてのラテン語作文を、現在筆者に判明している範囲で概観してみた。以下本項の締めくくりとして、キリシタン時代の西洋古典受容の特徴を、語学習得の水準、パフォーマンス性、そして動機付けの3点にまとめてみる。

まず単純に語学習得の水準としては、色々意見はあり得るものの現代の西洋古典を専門とする者の率直な感想として非常に高かったといえる。現在、日本のみならず欧米でも職業的西洋古典研究者で読むに耐える古代語の作文が容易に出来る者は圧倒的少数と思われる<sup>\*40</sup>が、キリシタン時代の日本人で高度な擬古典ラテン語作文能力がある者は少なくとも上記区分の第3期に複数存在し、第2期にもセミナリヨという特殊環境内で多数いた可能性がある。ちなみにこのセミナリヨは10代の少年達を寄宿制で数年間受け入れて勉学に集中させることが出来、特に1590年代初頭から半ば以降は日本人向けラテン語教材の充実やカリキュラムの現実に即した改革もあり、勿論イエズス会の運営する宗教組織ではあったが、人文・言語教育の場として理想的な環境であったと想像される。

ただセミナリヨで培われたラテン語力を利用してキリシタン日本人が当時のヨーロッパでも萌芽がみられ近代以降ドイツ等の研究大学で西洋古典学の正道とみなされるようになった、*Altertumswissenschaft* と呼ばれるような、古代の科学的復元を目指す作業<sup>\*41</sup>に参加していた形跡はない。つまりキリシタン時代の日本における西洋古典は言語・文化・精神の教材であって研究資料でなかったともいえる<sup>\*42</sup>。キリシ

<sup>\*40</sup> そのような能力を持つものも国内外に少数いるが、直近の古典学界では、古典語で行う作文会話等是一部変人の趣味扱いであり真っ当な学生・学者にとっては労力の無駄であるとみなされることが多い。例えば Hanson & Heath (2001) 169 参照。

<sup>\*41</sup> *Altertumswissenschaft* としての古典学については Percy (2005) 15-22 参照。

<sup>\*42</sup> もちろんこのような古典の教育的性質を重視する態度も、現在の文献学においては非科学的であるとして敵視・排除されがちではあるが、そもそもこの古典文化称揚

タン日本人のラテン語学習の目的は、あくまでもカトリック教会の典礼や教理書の理解、そして彼等の作文は明らかにイタリア中心のカトリック世界に顔を向けた言語パフォーマンスであった。そしてここから日本の西洋古典受容史におけるキリシタン時代の大きな特徴が一つ導き出せる。つまりキリシタン時代には西洋古典の受容と再生産の方向が、近代国家が確立していき欧米文化の吸収が国内消費に転換された明治以降の日本<sup>\*43</sup>とは大きく異なり、おおむね内向きではなく外向きであったということである。そしてまさに外向的であったそれゆえに、鎖国と禁教によってこの言語パフォーマンス観衆との交流が無くなったことが大きな要因となって、一時期あれほど高レベルに達した一部日本人のラテン語能力は、荒木トマスや後藤ミゲルのように転びキリシタンとして江戸社会で生きながらえた者達がいたのにもかかわらず、日本国内で継承されることなく消え去った<sup>\*44</sup>と筆者は理解する。また理想化された古典古代を真似し、利用する文化的パフォーマンスという、近世ヨーロッパに特徴的な精神運動がキリシタン時代の日本にも及んでいたという見方<sup>\*45</sup>もできるが、これについては同時に日本の在来知、つまりイエズス会も研究教育対象としていた日本古典

---

の姿勢が継承され続ける古典に存在価値を与えてきたのだという見方ができるし、特に西洋近世においてはこの態度が顕著に表れていたのも事実である。例えば池田(1991)56-58 参照。

<sup>\*43</sup> 佐藤(2007)76-95 参照。

<sup>\*44</sup> ただ日本人キリシタンのラテン語使用やセミナリヨでのラテン語教育の形跡が禁教下の日本で全て綺麗に消滅したわけではなく、いわゆる隠れキリシタンの間で「呪文」化したおらしょ(祈祷文)にラテン語起源のものがある(宮崎(1996)80-85)し、セミナリヨ用に印刷された羅葡日辞書が長崎通詞や幕史の家系で秘蔵されていたと思しい記録(宮永(2004)40-43)もある。しかし幕末期を除く江戸時代の日本人のラテン語理解は単語の意味程度にとどまるもので、古典鑑賞や作文まで至るような能力はなかった(宮永(2004)59-76)し、いわゆるシドッティ事件の際、例外的にラテン語文法が速効で学習されている(今村(2010)79-89)が、そのため出島オランダ人の教授が求められたことから分かるように、セミナリヨの伝統は生きた形では継承されていなかった。

<sup>\*45</sup> 根占(2006)141-145 等参照。

および漢文籍を言語的パフォーマンスに使うという、近似した既存の現地伝統とどれほどからみあった可能性があるのかを今後検討する余地があるだろう。

最後に受容の動機づけであるが、上記のパフォーマンスについてさらに言うと、これは近世カトリック世界で異質とみなされる可能性が大きかった日本人キリシタン達が(ヴァリニャーノ等の後押しも得て)イタリアおよびイベリア半島中心のカトリック教会組織に参入しようとする努力の一つの現れであったといえよう。1590年代前後の在日本イエズス会士達が、日本人にラテン語学習の動機を与える為には彼等に教会内のキャリアパス(イエズス会入会、司祭叙階等)を明確に示すことが必要かつ有効であると述べていることや<sup>\*46</sup>、逆に日本人を聖職ヒエラルキーから排除すべきと考えた人物が彼等のラテン語学習を禁じている<sup>\*47</sup>ことも、当時の古典受容と、現世的キャリアとしてのカトリック聖職界の密接な関係を示している。

現代の西洋古典を専門とするものが以上の事柄をみてくると、学習・受容の対象が同じでもその目的、動機、また学習成果の利用方法といった受容メカニズムの枠組みが今とキリシタン時代とではかなり違うことに気づかされるだろう。ただ柔軟な考え方をすれば、キリシタン時代の高い言語学習成果を評価して当時の教材や教授法を参考にすることも出来るだろうし、高尚な理念とはかけ離れたような現世的な事情が教育に及ぼしていた影響も現代の状況と重ね合わせて興味深くとらえることが出来るかもしれない。

---

<sup>\*46</sup> 井手(1995)56等参照。

<sup>\*47</sup> 井手(1995)51等参照。

## ジョルジュ・ロヨラ書簡 (ARSI Jap.Sin.10.II.296)——日本人による初のラテン語冒険譚？

日本人イルマン (修練士) ジョルジュ・ロヨラは、天正使節達の日本語教師として使節団に参加したのだが、ラテン語能力も確実に有していた形跡が幾つかある。中でも彼の名で使節帰還途上のゴアからイエズス会総長に発せられた 1587 年 12 月 6 日付のラテン語書簡は、数箇所意味不明ではあるがおおむね正確で語彙も豊かな擬古典文体で書かれている。校訂テキスト<sup>\*48</sup>と日本語訳<sup>\*49</sup>が既に出版されているが、そのラテン語文体は未だ詳しく論じられていないので、本項では特に文学性が高く書簡の中心となっているモザンビークからゴアまでの航海の描写に注目してとりあげてみたい。また手稿画像と既刊校訂テキストを筆者が比較検討し、加えて手稿をローマイエズ会文書館にて視認筆写された原田裕司氏の御指摘もいただいてまとめた当該箇所 (ARSI Jap.Sin.10.II.296r.12-v.16) の新校訂テキストを Appendix I として本稿に付す。電子画像を送付していただいたイエズス会の Mauro Brunello 氏とテキストの読みについて数々の貴重な助言をくださった原田氏に感謝する。

この書簡の作者として記されているジョルジュ・ロヨラは日本名不明だが 1560 年ごろ九州の諫早に生まれた日本人である。彼は二十歳に達したころの 1580 年、セミナリヨ発足と共にその生徒となり、その数ヵ月後にはイエズス会への入会を許されている。そして 1582 年に彼よりも 10 歳前後年下の天正使節達の日本語教師として随行離日し、以降使節団の一員としてポルトガルとイタリアを訪れたが、アジアに戻り帰国を間近にした 1589 年 8 月 16 日、マカオにて病没した。

このロヨラが使節団の帰途、ゴアでラテン語を学習していたこ

<sup>\*48</sup> Wicki & Gomes (1979) 741-746。

<sup>\*49</sup> 結城 (1993)35-39。



とは当時の記録に残っており、また上述の *De missione legatorum Iaponensium* もロヨラが日本語に訳す計画があった\*<sup>50</sup>。よって彼が書簡執筆時にある程度擬古典ラテン語に親しんでいたことは確実である。更にそれより前に、ローマに赴く途上の使節団がポルトガルのエヴォラ大司教に 1584 年 11 月表敬訪問を行った際にも、ロヨラがラテン語の引用句 (*huma autoridade em latim*) を書いたのを見て疑いの念を抱いた大司教がその場で彼のラテン語理解力を試験させたところ、合格したので非常に感嘆したと後の (おそらくフロイスの記した) 記録にある\*<sup>51</sup>。このエピソードはロヨラが既にラテン語を学習していたことを示しているのみでなく、日本人がこの言語を理解するということに対する西洋側の疑惑や驚嘆の念も当時よりあったことを伝えており興味深い。

このような疑惑の念に応えたわけではないだろうが、ロヨラは上記エピソードのおよそ 3 年後にこの書簡を発している。時期的には使節帰路、一年近くになったゴア滞在の半ばになったところで、また同地で 6 月初めに行われた原マルチノ演説の半年後となる。ちなみに当書簡は原マルチノ演説にもみえる駄洒落を使っており\*<sup>52</sup>、これら 2 つのテキストが同じ共同体から発していることを感じさせる。ただこの書簡を書いていたころロヨラはすでに病状重く、v.19-20 に *hanc...manu propria exarare non potui* とあるように起き上がって執筆する体力も無かったようで別人に口述筆記させている。

では当書簡の航海の描写をみていこう。この箇所は分量として書簡全体の 3 分の 2 近くを占めており、描写の対象はロヨラおよび使節団が 1587 年 3 月 15 日より同年 5 月 29 日まで、およそ 90 日間にわたってアフリカ南東部のモザンビークからインド南端のゴアまでの航

\*<sup>50</sup> ジョルジュ・ロヨラの事跡については結城 (1993)30-41 参照。

\*<sup>51</sup> 東京大学史料編纂所 (1959)84。

\*<sup>52</sup> r.37 (*gratias immortalī Deo et egimus et habuimus immortales*) を原演説 2.4-2.5(*tibi pro immortalī beneficio gratias ago et habeo immortales*) と比較。

海で実際に体験した事柄である。なおこの航海の描写は別にイエズス会歴史家バルトリによるイタリア語<sup>\*53</sup>、および *De missione legatorum Iaponensium* 内にラテン語 (374-376) の 2 編が存在するが、ロヨラのものはこれらより若干長く、詳細かつ文学的である。

その構成、すなわち、モザンビーク出航 (r.12-r.14) > 嵐と赤道通過 (r.15-r.40) > モガディシュ寄港 (r.42-r.45) > 大嵐 (r.45-v.10) > ゴア入港 (v.10-v.16)、は、中休みも入った起承転結のあるドラマチックなもので、叙述のバランスを考えた配慮を感じさせる。当時の地政学的状況を想起してみると、起点モザンビークから終点ゴアまでは(日本を含む東アジアにおけるイエズス会活動を支えていた) ポルトガル帝国の支配が明確に及んでいない地域で、この巨大な空白地帯における様々な危険を如何に熟練した航海士 (r.24-r.27)、イスラム教徒を含む水夫や地元民の援け (r.43-r.45、 v.6-v.8)、そしてイエズス会士達の祈りや聖人・聖遺物を通して得られた神の加護 (r.29-r.30、 v.1-v.6) により使節団が乗り越えたかを当該箇所はスリリングに物語っている。

構成の巧みさをみた次はラテン語文体の優雅な点を幾つかあげてみる。まず嵐の始まりの描写をラテン語に慣れた者が読むと、ピンと来るのは *cum vix in altum proveheremur*(r.15) の *vix* であろうか。航海中の嵐の描写というのはもちろんホメロス (Od. 5.286-464、 4.404-454) よりある西洋古典のトポスだが、ラテン文学における最も有名な例は当時のイエズス会士達にとっても馴染み深いウェルギリウス『アエネイス』1.34-156 だろう。そしてこの印象深いウェルギリウスの箇所の始まりは *Vix e conspectu Siculae telluris in altum/vela dabant...*(Aen.34-35) であるので、ある程度勘が鋭い読者ならばロヨラ書簡上記箇所の *vix* を目にしただけで次に大嵐の描写が来るだろうということは予想出来、まさにその予想が的中することによってある種の快感を得るのである。ちなみにおそらく当書簡より後に作成されたサンデ訳の *De*

<sup>\*53</sup> 東京大学史料編纂所 (1962)223-225。

*missione legatorum Iaponensium* でも同一時の描写に *vix* が使われており (*Vix e portu solveramus*: 374) これもウェルギリウスとの関係を感じさせる。ロヨラ書簡とウェルギリウスとの関係は直接的なのか間接的なのか現状では判断出来ないものの、嵐を予感させる *vix* は息の長いラテン文学の伝統がこの 16 世紀テキストにも流入していることを示している。

次にロヨラ書簡のコーロメトリーをみる。ただ当該箇所を全て扱う余裕は到底ないので、最後部の v.9-v.14 あたりに注意してみると、この安全な入港を祝う締めくくりで特に入念に区切られたコーラが続いていることに気づく。圧巻なのが *dulci...laetitia*(v.13-v.14) のトリコーロンであり、音節を数えると 9、11、13 と 2 音節ずつ伸ばした *tricolon crescens* である。他所もここほど分かりやすくはないが、時に均整をとり時にバリエーションを加えた音楽的なコーラ区切りが随所になされている。

またバリエーションというつながりでは当書簡の語彙も、おおむね古典的であるものの一部多様性がみられる。特に気づくのが *aplustria*、*suppara*、*artemona*(r.20-21)、*saburra*(r.44)、*malacia*(v.1) というような普通の古典テキストではあまり見かけない海運用語であろうか。航海中にもラテン語を勉強していた使節達があるいは身の回りにかこつけて習わされた語彙かと思われる。

ただ、当書簡のラテン語に粗がないわけではない。まず接続法の時制に関して、古典の規範に慣れた者からすると頭をかしげたくなるような選択が為されている場合がある (特に r.25(*deiisceret*)、r.29(*expugnaret*)、r.30(*servaremur*))。次項伊東マンショの書簡でも述べるが、接続法の時制に関しては日本人キリシタンも使用基準の理解が若干あいまいだった可能性がある。また r.16 にみえる表現 *de repente* も非古典的で、ヴルガタ聖書でも出現する<sup>\*54</sup>のでラテン語として誤っ

<sup>\*54</sup> Rubio (2009) 215 参照。

ているとは言い切れないが、注意の不徹底とロマンス俗語の影響を感じさせる。そして v.9 では *reliquia* が「聖遺物」の意味で単数で使われているがこの単語は古代から近世にいたるまでほぼ一貫して複数 (*reliquiae*) でしか使われておらず、1595 年刊の羅葡日辞書でも複数で表示されている。

さらに当書簡の当該箇所には書記の写し間違えに起因するかとされる過ちあるいは理解不能な文言も 3 点みられる。まず r.25 の *deii{s}ceret* だが、本当なら *deiecisset* と読みたいところだがより単純に *deiceret* の書き間違いと解釈するとしよう。それから v.6 の *navarilius* だが、手稿を直接視認された原田氏は *navarchus* の写し間違えであるとのこと意見<sup>\*55</sup>である。ところでもしこれが原田氏のいわれる通り写し間違えであるのならば、それがすなわち意味するのは現存手稿がロヨラの口述を一度筆記したものを、再度書記が写したものであるということである。もし直接口述筆記されたものならば、このように発音が大きく変わってしまう間違えは起こりえないであろう。ちなみに 16~17 世紀の東アジアのイエズス会では運搬中に失われることを懸念して同一書簡の写しを 2, 3 作成し別々のルートで送ることが普通であった<sup>\*56</sup>。最後に r.25 の (*per callocem*(は残念ながら意味不明である。まず *\*callox* のような単語は筆者が把握出来た限り近世ラテン語でも存在しない。サンデの重複箇所の表現 (*curatum est tunc ut armamenta praeciderentur*: 374) は簡潔過ぎて参考にならないので、パルトリの描写をみると *andò egli medesimo caualcioni su per l'albero*<sup>\*57</sup>とあり、これより察するに *per malum* という表現が適当な筈であるがこれでは現存手稿の読みと違いすぎる。何かの間違いが潜んでいる筈であるが今のところ残念ながら *crux* のままとしておく。

以上で文体の説明を簡単に済ましてしまうが、一番良いのは Ap-

<sup>\*55</sup> 原田裕司氏 2013 年 2 月 15 日付私信。

<sup>\*56</sup> 五野井 (1978)367-371 等参照。

<sup>\*57</sup> 東京大学史料編纂所 (1962) 224。

pendix Iにあるテキストを読み込んでもらうことだろう。そうすれば、この日本人キリシタンのラテン語作文としてかなり早い段階で現れているテキストが既に高い文学性および擬古典としての体裁を持っていることが明らかになるだろう。なお、どの程度ロヨラがこのテキストの作者と呼べるのかという問題については本稿の最後部で検討する。

### 伊東マンショのラテン語書簡 (ARSI Jap.Sin.33.66)—— *novam verborum vim*(「言葉の新奇な奔流」)

伊東マンショはかの天正使節団の正使2名のうちの1人で日本史の学校教科書にも名が出てくる有名人物なので、事績について多くを語る必要はないだろう。簡単に述べておくと伊東は1570年頃、武士の家系に生まれ、1580年、10歳前後で創立されたばかりのセナリヨに入学した。そして1582年から1590年にかけて使節団正使として離日し、ヨーロッパでは2代の教皇をはじめ数々の高位人物より歓待をうけている。帰国後の1591年3月には豊臣秀吉(本項でとりあげる書簡内の *Qua(m)bacus*) の謁見にあずかり、仕官の勧めを秀吉自身より受けるも辞退、同年7月、イエズス会に入会した。以降、1600年まで国内のイエズス会修練院およびコレジヨで研修を続け、後1604年頃までマカオにて研修、帰国後母校セナリヨの助手となり、1608年に司祭に叙階された。司祭となつてからは九州の小倉をベースに活動が続けたが、1611年暮れ頃長崎に引揚げ、1612年11月に同地で病没した<sup>\*58</sup>。

同じ天正使節団正使でありながら帰国後離教した千々石ミゲルと違い、ヴァリニャーノおよびイエズス会の期待に応える道を選んだ伊東は、そのおかげもあつてカローマイエズス会文書館所蔵の現存書簡が11点とかなり多い。うちポルトガル、スペイン、イタリア語の俗語で

<sup>\*58</sup> 伊東の事跡について詳しくはチースリク(2004)61-82参照。

書かれたものが8点、ラテン語のものが3点である<sup>\*59</sup>。彼のラテン語書簡のうち最も日付の早いものは1587年12月1日付で、上述したロヨラのものより数日早い、ロヨラ書簡がイエズス会総長宛なのに対し伊東のものは教皇宛で、内容も前者より儀礼的である。ただしこの書簡は清書された写しのほか多数の訂正跡がある草稿らしいものが珍しく現存しており<sup>\*60</sup>、今後別に検討する価値はあるかと思える。また伊東のラテン語書簡で日付上2番目となる、1592年9月15日のものは同じく教皇宛で内容は再度儀礼的である<sup>\*61</sup>。そして今回とりあげたいのが1592年12月1日付けのイエズス会総長宛のもので、その中の特にr.27以降にみられる古典受容に焦点をあてていきたい。

この日本史の有名人物によるラテン語作文は、翻訳<sup>\*62</sup>はあるものの原文テキストは未だ世に出ていないので、筆者が上智大学図書館キリシタン文庫蔵の複写版とローマイエズス会文書館のMauro Brunello氏より送付していただいた画像を基に起こし、更にローマで現物を視認筆写された原田裕司氏の御指摘もいただいてまとめた全文テキストをAppendix IIとして付す。さらに伊東の筆跡は非常に美麗で手稿自体の芸術的・文化的価値も少なからぬものがあると思われるので当書簡1ページ目始まりr.3~20の画像をローマイエズス会文書館の許可<sup>\*63</sup>を得て複写しAppendix IIIとする。

さて当書簡は先のロヨラのものとは違い、発送者直筆の手稿が遺されているわけだが<sup>\*64</sup>、細かく見ると書き間違いを後で訂正した跡がみ

<sup>\*59</sup> 結城(1990)248 参照。

<sup>\*60</sup> ARSI Jap.Sin. 33.38r.-39v.(清書)、ARSI Jap.Sin.33.40r.-41v.(草稿)。結城(1990)248によると清書はメスキータ(ポルトガル人イエズス会士、天正使節随行員)の字だが草稿は伊東の筆跡。

<sup>\*61</sup> ARSI Jap.Sin.33.62r.-63v.=ARSI Jap.Sin.33.64r.-65v.。ただしこちらはマンシヨ達<sup>3</sup>が在欧中親切に応接され後に教皇になった人物にあてたもので上記の書簡よりは個人的な親愛の情が表れているように読める。

<sup>\*62</sup> 結城(1993)130-133。

<sup>\*63</sup> 156号、2013年3月7日付。

<sup>\*64</sup> ただr.35-v.3 (Tunc...1592.)は筆跡が異なっているようであり他人が書いている可

える。これらの中には単に筆記体や言葉そのものがまぎらわしくて書き損じたのを直したケース (r.15-16、r.23) があり、また v.3 の <A>m-では字体の見誤りから生じた書き損じが直されずそのままになってしまっているようである。さらに r.8 で ne が後から控え目に書き添えてあるが、これが無いと意味が通じなくなってしまうし、おそらく続く r.8 の me がまぎらわしかったのだろうが、このような訂正跡を目にしてみると伊東が自分の書いていることを全部理解出来ていたのか多少不安にはなる。

さらにこれは文法上の統辞ということになるが v.28 の *exponerem* も *exponam* がほしいところではある。上述の 1587 年 12 月 1 日付伊東書簡の草稿でも r.10 に *essemus\simus/*とあり、当時ラテン語作文を学んでいる者も従文の接続法時制選択に困難を覚えることが度々あったかと思われる。

上記以外には書簡内で特に筆者の気づいた粗はないので、次に r.27-r.34 を詳しくみていきたい。この箇所は *Hic ego novam verborum vim mihi divinitus infundi cupio*(r.27) という文言で始まっており、結城訳では若干単純化して「私の言葉に神が新しい力を与えてくださるよう祈ります」\*<sup>65</sup>となっているが、古典ラテン語に慣れているものからすると幾つか気づく点がある。まず細かい語義だが、形容詞 *novus* はよく教室で言われるように古典では「新奇な」、「驚異的な」、「不思議な」というような意味でもよく使われ\*<sup>66</sup>、1595 年の羅葡日辞書\*<sup>67</sup>でも *Xinji gataqi fodo naru coto* という定義もあるので単なる「新しい」より深い意味があると理解してさしつかえないだろう。またすぐ後の句にある *insolitam voluptatem*(r.27-r.28) もこのような語義を補強して

---

能性がある。

\*<sup>65</sup> 結城 (1993)132。

\*<sup>66</sup> OLD s.v.2-5 等参照。

\*<sup>67</sup> 以下 1595 年天草版羅葡日辞書からの引用はオンラインの対訳ラテン語語彙集 <<http://joao-roiz.jp/LGR/search>>をさせていただいた。

いるようである。次に名詞 *vis* だがこちらも古典ラテン語では幾つか意味がありその中には「勢い」や「(量の) 多さ」\*68 といったものがあり、これらもまた羅葡日辞書の定義 (*Fayaqi iquioi, Vouosa*) によっても確認される。よって *novam verborum vim* というのはここでは「言葉の新奇・驚異的な奔流」というような解釈もできようか。そして再度全体をおおまかにみて、語り手が自身にとって新奇あるいは不慣れな事柄を述べる為に神的な (*divinitus*) 助けを乞うというのはホメロスより始まりウェルギリウスやスタティウス、ほか無数のラテン語叙事詩の導入部にみられるトポスであるということにも留意したい。

そしてこの文章に続く *r.29-r.34* がまさに詩的といえるのであるが、受容されているのは圧倒的に異教古典よりもキリスト教起源の文言で主に旧約聖書の詩編からとられている。流用されている旧約聖書の文言を示してみると、*Benedicat...eius(r.29) < Ps.102.1, eripuit me(r.29) < Ps.17.18, de...servitutis(r.29-r.30) < Ex.13.3, terram...melle(r.30) < Ex.3.17, Oblivioni...eius(r.30) < Ps.102.2+Ps.136.5, non...homo(r.31) < Ps.117.6, Dominus...suae(r.34) < Ps.27.8* が筆者の気づいた範囲内である。これらはあるいは伊東が当時在籍していた修練院において暗記訓練や説教の練習\*69を通じて学ばされた文言かとも思われる。ともかくも、少なくとも近代的な見方からすると導入文より予期されるような新しい、独創的な文言ではない。しかしまた、キリスト教と異教伝統を切り離し、相互対立するものとする傾向にある我々からしてみると新奇あるいは驚異的な事象として、*r.31* から *r.34* にかけて旧約聖書的文言が突然途切れ、キケロ風ペリオドスが割り込んできていることがあげられる。特にこの箇所の後半で明らかにキケロ起源の言い回しが2つあり、すなわち *ex omnium scelerum colluvione (r.33) < Cic.Sest.15* と *pestem ac perniciem (r.33) < Cic.Div.1.23 (etc.)* であり、

\*68 OLD s.v.7, 8 参照。

\*69 結城 (1993)131 参照。また当時のイエズス会修練院における暗記訓練等についてはチースリク (1978)182-186 参照。



これらは確実に古典の味をこの部分に付与している。伊東が自身のイエズス会入会の喜びを在ローマのイエズス会総長その人に報告する際に、古代後期ラテン語経由のヘブライ宗教詩と、真正な古典ラテン語散文という一見相容れないような伝統を合体させ、まさに *novam verborum vim* として提供しているのは我々近現代の読者としては興味深い点ではないだろうか。

### キリシタン時代日本人のラテン語作文と「作者」の問題 ——特に西洋古典の観点から

さて上2項でジョルジュ・ロヨラと伊東マンショが発信者となっているラテン語書簡2点を取りあげ、その文体や文学性を論じたが、これらを日本人によるラテン語受容という観点から扱う以上避けて通れないのが「作者」の問題である。すなわち近年これらテキストを扱ってきた研究者の多くは漠然とした東西文化の乖離の感覚から(まさに上述のエピソードでロヨラのラテン語能力を疑ったエヴォラ大司教のように)、また時には同時代テキストが伝える情報の恣意的な選択・解釈<sup>\*70</sup>によって、キリシタン日本人、特に天正使節団の言語能力を非常に限られたものと看做し、彼等が書いたとされるラテン語テキストはヨーロッパ出身のイエズス会士達がかかなり代筆しているのではないかというような示唆をしている<sup>\*71</sup>。しかし他方では、少なくとも上述第3期の日本人キリシタン達の一部が単独でラテン語文書を作成していることに対しては疑いの余地がないし、また天正使節団の日本人参加

<sup>\*70</sup> 一例を挙げると、ある一次資料(東京大学史料編纂所(1962)199)が、ヨーロッパを訪問した時点での天正使節団はラテン語を文法(*Grammatica*)までしか学習していなかったと記していることをとりあげて松田(1999)315は原マルチノが帰還時ゴアで行った演説も随行教員のメスキータが作成したと推測しているが、同資料中にみえる、使節達が複数のヨーロッパ俗語で会話が出来たという証言は信用出来ないとして排除している。松田(1999)369-371も参照。

<sup>\*71</sup> Wicki(1979)741、渡邊(2012)11参照。

者が擬古典ラテン語を学習出来る状況にあり、ある程度実際に学習していたことは確認出来る。更に彼等が作者とされるラテン語作文を精査してみると一部粗がみられるがまさにこのことが(作文において比較的初心者であった)彼等が作成していることを証しているのではないかという見方もできる<sup>\*72</sup>。

しかし別レベルで考えるにこの非常に近代的で、それゆえポストモダニズムの攻撃対象ともなってきた、原点としての、そして独立し独創性を持っている(べき)「作者」の概念<sup>\*73</sup>を無自覚に上記の近世文化交流の最中で生じたテキストにあてはめることに問題があるのではないだろうか。イエズス会という、16世紀前半に創立されたばかりの若い組織が、野心溢れる巡察師ヴァリニャーノのもとで東アジア、そして(短期間ではあったが)日本において驚異的な文化交流を実現させたその情報の渦から、様々なラテン語テキストが生じてその一部が今にいたるまで遺されているわけだが、例えばヴァリニャーノやサンデが作成に関わったとされる *Catechismus* や *De missione legatorum Iaponiensium* もその成立過程が複雑で未だ全容が解明されていないことは上で述べたとおりである。そして本稿がとりあげた第2期初期の2書簡や、あるいは原マルチノのゴア演説等、同時期の日本人作者の名のつく文書も、表向きの作者以外に、その場その場の(ヨーロッパ人のみならず日本人も含む)イエズス会教育・修練等を運営形成していた共同体がその周辺に存在しおそらく随所で介入しており、よってこの場合の「作者」とは編集者、責任者、あるいは共同体より得た学習成果を披露する学生、のような立場であったと理解すべきではないかと思われる。つまりジョルジュ・ロヨラ、伊東マンショ、さらに原マルチノは、彼等の名がつくラテン語文書に関するかぎり、完全に疎外された部外者であったとはみなすことには到底賛成できないが、他方で近代的で硬直した思考枠組みでとらえられるような、孤立した、

---

<sup>\*72</sup> 渡邊(2012)13も参照。

<sup>\*73</sup> コンパニオン(2007)45-103参照。

独創的な、原点としての「作者」と考えるべきでもなく、それよりもラテン語や古代地中海の古典籍を含む様々なヨーロッパ文化学習のある意味通過点とみるべきであると筆者は提案したい。

そしてこれらのラテン語テキスト、特に日本人作者の名がつくものはこれから日本の西洋古典学専門家が解明検討に積極的に参加していくことが望ましいというのが筆者の考えである。まず本項でも示せたかと思うが、これらラテン語テキストの内容と文学的価値を理解し、文体を正当に評価するためには、専門的な西洋古典の知識が欠かせない。日本人キリシタンのラテン語作文には古典や他古代～近世ラテン語テキストの受容が広範に見受けられるが、それらにまず気づくため、そしてその意義評価を行う際にも、ラテン語文学全般の知識と近年の受容研究を含む学界動向の感覚がどうしても必要である。そしてまた、キリシタン時代の文化背景を理解し、在来のキリシタン研究の成果を利用するためには、日本語の知識が必要であるし資料や研究者等の資源が揃っている日本に居ることが望ましい。さらに、日本をめぐる国際文化交流とキリシタン禁教および鎖国体制は、ケンペルや和辻哲郎等様々な知的巨人達が昔から取り組んできた大きなテーマであるが<sup>\*74</sup>、キリシタン日本人によるラテン語学習というごく限定的な小分野も、大局的にはこの現代日本人にとって大きな意味を持つ問題に繋がっており、今後の研究の進展がこの理由からも望まれるだろう。

## 参考文献 (邦文のち欧文)

- 浅野啓子ほか (編著)(2006)『教育の社会史——ヨーロッパ中・近世——』知泉書館
- 池田亀観 (1991)『古典学入門』岩波書店

<sup>\*74</sup> 近年の総括として上垣外 (1994)、またキリシタン史からの代表的な観方としては五野井 (2002)222-271 等参照。

- 井出勝美 (1995) 『キリシタン思想史研究序説』 ペリカン社
- 今村英明 (2010) 『今村英生伝』 ブックコム
- 岩生成一 (1966) 『南洋日本町の研究』 岩波書店
- 尾原悟 (編)(1981) 『キリシタン文庫イエズス会日本関係文書』 南窓社
- 片岡千鶴子 (1969) 『八良尾のセミナリヨ』 キリシタン文化研究会
- 上垣外憲一 (1994) 『「鎖国」の比較文明論——東アジアからの視点』 講談社
- 岸本恵美 (2013) 「キリシタン語学の辞書」 豊島 (編):224-245
- 桑原直己 (2009) 「キリシタン時代における日本のイエズス会学校教育」、『哲学・思想論集』 34:144-129
- 五野井隆史 (1978) 「イエズス会日本年報について——その手写本の所在を中心にして——」 『キリシタン研究』 18:317-378
- 五野井隆史 (2002) 『日本キリシタン史の研究』 吉川弘文館
- 五野井隆史 (2007) 「教区司祭荒木トマスに関する未刊書翰について」、『サビエンチア：英知大学論叢』 41:25-40
- コンパニオン、A(著)、中地義和ほか (訳)(2007) 『文学をめぐる理論と常識』 岩波書店
- 佐藤道信 (2007) 『美術のアイデンティティー——誰のために、何のために』 吉川弘文館
- チースリク、H.(1978) 「白杵の修練院」 『キリシタン研究』 18:143-255
- チースリク、H.(監)、五野井隆史 (編)(1995) 『大分県先哲叢書ペトロ岐部カスイ資料集』 大分県教育委員会
- チースリク、H.(2004) 『キリシタン時代の日本人司祭 (キリシタン研究 41)』 教文館
- 東京大学史料編纂所 (編)(1959) 『大日本史料第十一編別巻之一』 東京大学
- 東京大学史料編纂所 (編)(1962) 『大日本史料第十一編別巻之二』 東京大学
- 豊島正之 (編)(2013) 『キリシタンと出版』 八木書店

- 根占献一 (2006) 「フマニタス研究の古典精神と教育——イエズス会学校の誕生頃まで」 朝野ほか:125-148
- 原田裕司 (1998A) 『キリシタン司祭後藤ミゲルのラテン語の詩とその印刷者税所ミゲルをめぐって』 近代文芸社
- 原田裕司 (1998B) 『ラテン語が教えるもの』 近代文芸社
- 原田裕司 (2011) 『キリシタン版『羅葡日辞書』の原典「カレピーヌス」ラテン語辞典の系譜』 修明社
- 松田毅一 (1999) 『天正遣欧使節』 講談社
- 松本仁助 (1965) 「ケーベル博士と日本の西洋古典学」 『パイディア』 4:42-48
- 三木計男 (2007) 『ディオゴ結城了雪と阿波公方』 三木計男
- 宮崎賢太郎 (1996) 『カクレキリシタンの信仰世界』 東京大学出版会
- 宮永孝 (2004) 『日本洋学史:葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』 三修社
- 結城了悟 (1990) 『新史料天正少年使節 (キリシタン研究 29)』 南窓社
- 結城了悟 (1993) 『天正少年使節——史料と研究——』 聖母の騎士
- 結城了悟 (2008) 『殉教者ディオゴ結城了雪——1574-1636——他人のために生きた人』 日本二十六聖人記念館
- 渡邊顕彦 (2012) 「原マルチノのヴァリニャーノ礼讃演説——古典受容の一例として——」 『大妻女子大学比較文化学部紀要』 13:3-19
- 渡邊顕彦 (2013) 「ディエゴ結城の 1615 年 8 月 2 日付クラウディオ・アクアヴィーヴァ宛書簡 (ARSI Jap.Sin.36.245r-246v.)——ラテン語原文と注解」 『大妻女子大学比較文化学部紀要』 14:94-112
- Pasquale M.D' Elia、本田善一郎 (訳)(1959) 「ローマを訪れた最初の日本人ベルナルド」 『キリシタン研究』 5:3-31
- Abbott, D.P. (1996) *Rhetoric in the New World: Rhetorical Theory and Practice in Colonial Spanish America*. Columbia, SC
- Bonifacio, Juan (1588) *Christiani pueri institutio adolescentiaeque perfugium*. Macau (facsimile 1988 Lisbon)

- Burnett, C. (1996) "Humanism and the Jesuit Mission to China: The Case of Duarte de Sande (1547-1599)" *Euphrosyne* 24:425-470
- Cuzzolin, P. and P. Baldi (eds.) (2009) *New Perspectives on Historical Latin Syntax I*. Berlin
- Goldhill, S. (2002) *Who Needs Greek? Contests in the Cultural History of Hellenism*. Cambridge, UK
- Ijsewijn, J. and D. Sacré (1998) *Companion to Neo-Latin Studies Part II: Literary, Linguistic, Philological and Editorial Questions*. 2<sup>nd</sup> ed. Leuven
- Jesuits (1598) *Cartas que os padres e irmãos da Companhia de Jesus escreverão dos reynos de Japao & China aos da mesma Companhia da India & Europa, des do anno de 1549 até o de 1580*. Evora
- Keevak, M. (2011) *Becoming Yellow: A Short History of Racial Thinking*. Princeton, NJ
- Kure, S. (1955) "Les etudes latines dans le monde: I. au Japon" *Revue des Etudes Latines* 33: 100-103
- Hanson, V.D. and J. Heath (2001) *Who Killed Homer? The Demise of Classical Education and the Recovery of Greek Wisdom*. San Francisco, CA
- S Haskell, Y. and J.F. Ruys (eds.) (2010) *Latinity and Alterity in the Early Modern Period*. Tempe, AZ
- Laird, A. (2010) "Latin in Cuauhtémoc's shadow: Humanism and the Politics of Language in Mexico after the Conquest" in Haskell & Ruys:169-200
- Moran, J.F. (1993) *The Japanese and the Jesuits: Alessandro Valignano in Sixteenth-Century Japan*. London
- Moran, J.F. (2001) "The Real Author of De Missione Legatorum Iaponensium ad Romanam Curiam...Dialogus" *Bulletin of Portuguese/Japanese Studies* 2: 7-21
- Pearcy, L.T. (2005) *The Grammar of our Civility*. Waco, TX

- Rubio, G. (2009) “Semitic Influence in the History of Latin Syntax” in Cuzzolin & Baldi; 195-239
- Valignano, A. (J.L. Alvarez-Taladriz ed.) (1954) *Sumario de las cosas de Japon (1583), Adiciones del sumario de Japon (1592)*. Tokyo
- Waquet, F. (J. Howe trans.) (2002) *Latin: or the Empire of a Sign*. London
- Wicki, J and J. Gomes (eds.) (1979) *Documenta Indica XIV, 1585-1588*. Rome

*Sigla et abbreviationes:*

- †...† *crux*  
 {...} *supervacaneum*  
 [...] *textus ms. mancus*  
 <...> *perperam omissum*  
 \.../ *postea additum*  
 --- *cancellatum vel in aliud mutatum*  
*DI*= Wicki, J et J. Gomes (edd.) (1979) *Documenta Indica XIV, 1585-1588*. Romae: Doc. 108

Appendix I: ARSI Jap.Sin.10.II.296r.12-v.16

ARSI Jap.Sin.10.II.296r.

- 12 Postquam per semestre spatium in Moçambiquensi insula hiberna egimus, accepto ab il-  
 13 lius orae duce myoparone, omnem spem et fiduciam in Deo collocantes, felicissimique Orientis potiundi,  
 14 qui nos iam per annum fugere videbatur, studio inflammati, fausto omine profectionem in Indiam suscepimus.  
 15 Postera elucescente die, cum vix in altum proveheremur, ecce tibi taetra caligine densisque tenebris  
 16 caelum obducitur, de repente trux adeo coortus est turbo, ut navem undis obversam in latius dex-  
 17 terum ita inclinati, ut per marginem tumentes fluctus non sine maximo nautarum nil tale opinantium  
 18 terrore conceperit. Omnes, cum extremum periculum impendere animadvertent, lacrimis luctuosoque eiulatu  
 19 divorum opem, purissimae praesertim Deiparae, enixissime obtestabantur. Vectores expallescent, et perturba-  
 20 tos animos, obiecta morte a ratione paene alienos, metus obstupescit. Cuncti pro vita gnaviter depugnant,  
 21 et quisque ad naucteri iussa obeunda sibi negligens videtur. Alius districto ense aplustria disecare,  
 22 alii suppara colligere, alii contrahere artemona, no(n)stri exhaurire sentinam, denique totius doloris ac  
 23 formidinis tragoedia excitabatur, nihilque tum morte certius, nihil exitio praesentius, si humanitus  
 24 rem pendas, apparebat. Et res acta esset, nisi navis magister, qui navigandi artem recte caluerat,



25.†per calloce† celeri gradu ascendens dolonem cum antemna in perturbatum mare dei[s]ceret. Tunc navis,  
 26. velorum pondere libera, quae vento in eam partem in quam illa inclinat reiecta ipsam vehementius de-  
 27. primebant, paulisper rediit et quasi respiravit. Adhuc ventus undas concitans debacchabatur et collisorum  
 28. inter se fluctuum concursu navigii latera vehementissime oppugnabat, ac tristi rerum omnium iac-  
 29. tura expugnaret, ab ipsis denique pelagi faucibus sospites servaremur. Sed diurno labori noc-  
 30. capitis dimicatione, ab ipsis denique pelagi faucibus sospites servaremur. Sed diurno labori noc-  
 31. turnus successit. Navis nudata velis, fluctuantibus undis agitata huc illuc iactabatur, densa  
 32. caligo caelo marique offundebatur, astra salutaria tenebris circumfusa delitescebant, increbescens vento  
 33. ingens aquarum vis offundebatur, ita ut et caelum ruiturum imbribus et myoparonem gurgitibus hau-  
 34. riendum existimares. Aliqui sibi eo leto pereundum rati, nixis genibus suum ipsi spiritum suo credere  
 35. Creatori. Verum turbulentae noctis asperitatem tranquilla diei serenitas excepit, qua iacentes  
 36. animos extulit, a maerore ad gaudia revocavit, et laboris proximi formidolosos angores abstersit.  
 37. Quare effuse laetati, gratias immortalī Deo et egimus et habuimus immortales. Navi iterum  
 38. apte instructa, cursum progressi, immodicos zonae torridae calores illa die superavimus, qua Serva-  
 39. tor noster in cruce peremptus genus hominum a misera cacodaemonis servitute vindicavit. Enim-  
 40. vero adverso ventorum flatu arrepti, Aethiopiae oram non sine Syrtium periculo legebamur,  
 41. ac necessitate cogente, per aliquam dierum interapedinem ad anchoras prope florentissimam urbem,  
 42. clarisque aedificiis nobilem, ab indigenis Magadaxō nuncupatam, idoneum proficiscendi tempus op-  
 43. perientes stetimus. Hic nostri a Mahometano rege, praemisso cum obsidibus xenio, perhumaniter ac-  
 44. cepti et saburram, quae in navi desiderabatur, importarunt et multa ad commeatum pertinentia, quae  
 45. ibidem affatim suppetebant, invexerunt. Ubi aura favit vela fecimus, sed breve iter emensi,<sup>s</sup>

25.†per calloce† sic ms. et DI. Fortasse pro per celocem.

## ARSI Jap.Sin.10.II.296v.

1 flaccescere vento, marique languente, aliquo temporis intervallo fuimus in malacia, in qua nostrates,  
 2 ut hominum animos ad divinam opem implorandam excitarent, aram in puppi exstruunt, et venerandum  
 3 veprem, quo olim sacrosanctum Servatoris nostri caput crudelem in modum transfixum fuit, cruci  
 4 argenteae insertum in omnium oculis defigunt, omnesque orthodoxae pietatis cultores ad illum modeste  
 5 deosculandum convocant. Haec et alia id genus, eas omnibus admovere faces, eos addidere stimulos,  
 6 ut ipse †navarilius† pecuniam a singulis ad sodalitatem Divi Saturnini iuvandam deprecaretur[† Quo]d  
 7 ita vectorum studium exacuit, ut non tantum qui Christi nomine censebantur, verum etiam  
 8 Mahometani nautae suam erogarint stipem. Hic experimento sumus assecuti, quoties sacrerrima  
 9 illa reliquia deprompta fuit, voti nos compotes evasisse. Denique post diuturnam maris  
 10 iactationem, post saevientium ventorum procellas gurgitesque effervescentes, praeter omnium spem  
 11 expectationemque ad optatum Goae litus appulimus. Nostri homines, nil tale cogitantes, de fra-  
 12 trum suorum adventu commonentur. Accurrunt, scaphas conscendunt, obvii fiunt, mutuis com-  
 13 plexibus amoris et benevolentiae non vulgaris signa prae se ferunt. Tandem dulci aulodorum  
 14 symphonia, laeta campanarum pulsatione, communique totius urbis laetitia, in Divi Pauli collegium  
 15 recepti sumus, ubi eo magis omnium in nos caritas enituit, quo antea acerbius de rerum nostrarum  
 16 eventu anceps cruciabatur. Hactenus de navigatione.

1. flaccescere sic ms. flavescens, *DI*.

6. †navarilius† pro navarchus *perperam descriptum*, *Harada*. Pro navarchus vel navicularius, *DI*. 6. Quo]d conieci.

## Appendix II: ARSJap.Sin.33.66(vel 61 sec. rationem novam)

ARSJap.Sin.33.66r.

+

Colende admodum Pater

Pax Christi

Non equidem oratione possum facile explicare magnam iucunditatem, qua Vestrae Paternitatis epistula, praeterito anno 1591 mihi reddita, animum meum recreavit. Ea enim, et plenissimam paternae pietatis sollicitudinem, et singularem in me gentemque meam propensionem, non vulgaribus argumentis contestabatur. Deum bonorum omnium originem obtestor, ut ipse, quod imbecilla ac fragilis virium mearum exiguitas non valet, istam egregiam voluntatem aeternis muneribus recompenset. Ego interim nervos omnes contendam, \ne/ me ulla unquam aetas illius immemorem queat obiurgaret. Diutius in gratiis tibi, colende admodum Pater, referendis immorari cupientem vehementer quidam mentis ardor me ad aliam narrationem contexendam rapit, cui, si non incensae voluntati, at epistulae legibus inserviens, breviter satisfaciam. Postquam superatis longissimae navigationis difficultatibus dubisque ac laboriosis rerum eventibus salvi et incolumes ad Nagasaquii portum appulimus, nihil antiquius, nihil potius duxi, quam omnes adhibere conatus, ut voti, quod multis annis animum meum inflammabat, compos evaderem. Sed cum Pater Visitor in Miacensem curiam profecturus me illius itineris socium sibi adiunxerit, non mihi liberum fuit exsequi, quod optabam, et licet spes, quae differtur, affligat animu\m/a/m, cum tamen divinam providentiam omnia in melius disponere cogitarem, mentem paululum recreabam. Meacum demum pervenimus, ubi Quambacus (qui, ut scis, hoc tempore in Iaponia rerum potitur) missam sibi ab Indiae prorege legationem magnis benevolentiae signis prosecutus est. Accidit, ut ea tempestate vir quidam mihi affinitatis vinculo coniunctus in Quabaci curia diversaretur, a quo rex de meo adventu certior factus, me singulari benignitatis et amoris indicio complexus, pollicitationibus in aula sua retinere conabatur. Cum tamen animus meus fluxam et caducam rerum humanarum condicionem, Deo movente, iam posthabuisset, et pertas Christi omnium divitiarum copiis pulchrior mihi apparuisset, qua potui grati animi significatione tam liberalem et magnificam voluntatem gratulatus, me ab ineu\nte aetate patrum societatis alumnus esse, ab eorumque latere numquam

24 discedere in votis semper habuisse respondi. Haec sane diaboli, boni totius taeterrimi hostis, molitio mihi visa fuit, ut  
 25 me a sententia deicere aut a proposito posset detertere. Deus tamen, Pater misericordiarum, conatus meos provexit, et  
 26 a saeculi laboriosis brevibus atrocibusque procellis ereptum ad sanctissimae societatis (cuius tu amantissimus pater es) tran-  
 27 quillum salutaremque portum adduxit. Hic ego novam verborum vim mihi divinitus infundi cupio, ut insolitam volup-  
 28 tatem tibi exponerem, qua animus meus perfusus triumphavit, dum me id quod ita avide concupiscebam adeptum esse con-  
 29 templor. Benedicat anima mea Domino, et omnia, quae intra me sunt, nomini sancto eius, quia eripuit me de domo ser-  
 30 vitutis, et adduxit in terram fluentem lacte et melle. Oblivioni detur dextera mea, si oblitus fuero omnes retributiones eius.  
 31 Iam, colende admodum Pater, tuorum filiorum numero ascriptus non timebo, quid faciat mihi homo. Ingruat saeva nefariae  
 32 improbitatis tempestas, ut divinam religionem a Iaponiae finibus expellat atque adeo ex ipsa hominum memoria deleat;  
 33 perditus et ex omnium scelerum colluvione emersi tyranni in nos pestem ac perniciem machinentur; nihil reformida-  
 34 binus, Dominus enim fortitudo plebis suae. Eveniatque, et utinam cito tam felix sors mihi eveniat, ut inter acerbissi-  
 35 mos cruciatus vitam ipsam pro sacra religione effundam. Tunc enim me vere beatum ac felicem putabo, tunc labore<s>  
 36 omnes, quos terra marique pertuli, recte fuisse positos ducam. Huiusmodi tamen res sicuti ceteras divina providen-  
 37 tias

35-v.3. Tunc...1592. *fortasse alterius manu.*

ARSI Jap.Sin.33.66v.

1 regit, et ad finem debitum summa cum potentia ac suavitate perducet. Interim me, meosque socios, fratresque  
 2 omnes precibus et sacrosanctis sacrificiis Vestrae Paternitatis apud Deum Optimum Maximum valde commendatos cupio. Datae  
 3 in Collegio Societatis Iesu apud <A> macusa Calendis Decembris anni salutis 1592.

Vestrae Paternitatis

Filius indignissimus

Ito Mantius

Appendix III: Imago ARSI Jap.Sin.33.66(vel 61 sec. rationem novam):r.3-r.20

Non equidem oratione possum facile explicare magnam incunctitatem, qua D. D. epistola praeterito  
 anno 1591 mihi recte aditum meum venerat: ea enim, et plenissimam pacem praestitit illi:  
 salutem, et singularem in me. gentem meam propositionem non ulnaribus argumentis contestatur.  
 Quam hominum omnium omnium ostendit ut ipse, quas videret, ac singulis verum manum exquiras  
 non vult. illam epistolam salutem atque munus reueneret: ego interim meos omnes exultantem  
 me ulla angustiam. Hic illius immemorem quae obuiam. Dilectus ingratissimis tibi coloris actionem pate-  
 rescentis immemori capientem uelentem quidem mentis auctor me ad aliam narrationem contententiam reuocet,  
 non inuenit uoluntati, at epistola scriptis insistentis, breuiter satisfaciam. Dilectam superatam longissime  
 nauigatione. Difficultatibus, dubiis ac laboriosis rerum euentibus salui, et inuoluntis ad nauigationem portum  
 appulsum, nulli antiquius, nihil potius aliam quam omnes adhibere tentatis, ut uoti, quas multas annis animae  
 meae inflammabat, tempore euacuem. Sed cum D. Bructator in pacem meam profectus me illis ite-  
 re possum. Mihi adueniret non mihi liberum fuit: ex quo quae optabam, et licet ipse, quae desiderat, effugit.  
 enim, cum tamen Unicum providentiam omnia in melius disponere capitulum mentem paulatim reuera:  
 bam. Illucum demum peruenimus ubi Quamuis qui utitur hoc tempore in sapientia rerum potest, mihi  
 tampli ab infra George legationem magnus benivolentia opus protecutus est. Amabile ut ea tempore ut  
 quidem mihi affectibus uiuere conuenit in Quibus omnia transactur usque hoc de meo actu uti uenerat:  
 his me singularem benivolentis, et amoris meliora palatantibus in aula sua reuocare conuocatus, cum